

日本語文法（現代）

川端 元子

本年の動きを次の3つの点から整理する。

1点目は個別の表現の背後にある言語体系へのまなざしを持つ研究である。日本語学会（春）のシンポジウム「日本語記述研究の未来」では、言語現象をその背景にある言語体系の中に位置づける視点の重要性が議論され、共時研究における通時的視点や方言研究における地域を超えた視点が示された（『日本語の研究』14-4,2018）。同様のものには、大西拓一郎「交易とことばの伝播」（『日本語学』37-9,2018）、藤田保幸他編『形式語法研究の現在』（和泉書院,2018）、岡崎友子他編『バリエーションの中の日本語史』（くろしお出版,2018）がある。

2点目は、変化する言語表現をとらえる際の規範意識に着目した研究である。「日本語の先端的な動向の解明と、そのための新しい資料論」と題された日本語学会（秋）のシンポジウムでは、コーパスやインターネット上の生きた言語資料の信頼性と特性などが議論され、表現の主体がおかれた環境や、主体や主体の所属する社会の規範意識に着目した。また、島田泰子「副詞『なんなら』の新用法」（二松學舎大学論集61,2018）、新野直哉「平成期『朝日新聞』の記事に見られる副詞“全然”に関する規範意識」（『国語学研究』57,2018）、塩田雄大「学歴と日本語意識」（『日本語の研究』14-2,2018）などは、新しい表現のとらえ方とその妥当性の判断をもたらす規範意識について取り上げた

ものである。さらに、文体の「硬度」「くだけ度」をもとに、使用される表現の文体差を数値化する馬場俊臣「接続詞の文体差の計量的分析の試み」（北海道教育大学紀要69-1,2018）も興味深い。

3点目は、言語表現が出現する場面に注目する分析手法の必要性を指摘する研究である。白川博之「日本語研究から日本語教育研究への越境」（『日本語の研究』14-2,2018）では、類似表現の意味記述において、それが使われる場面に着目する。文法的に考えることの重要性に改めて注目した天野みどり「日本語文法研究と教育の接点」や、野田尚史「日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか」（ともに『日本語文法』18-2,2018）も、言語表現を、学ぶ側や教える側の視点から理解することの重要性に気づかせてくれる。

その他の動きとしては、表現学会のシンポジウム『「語り論」の新展開』において、「物語における人物の発話・思考の語り方、および注釈的な表現に注目」した議論もなされた（野村真木夫「物語における視線とマイクロマクロリンク」『表現研究』108,2018）。物語の語り手には通常の発話では不自然とされる表現も可能となり、登場人物の心中や思考を文中に組み込むこともできる。さらに、文末の述語や修飾語には、場面の意味が構造化されて内在していることも議論された。

このように、言語形式に内在する意味の構造は、発話の環境や表現主体の意図を反映する。言語表現の意味をその文脈や言語の体系の中でとらえ、出現する資料の特性とともにそれを理解する分析手法の進展が望まれる。（愛知工業大学）